



FUJI WOMEN'S UNIVERSITY

No.75

Dec.20, 2022

# 藤

藤女子大学  
広報



(中) 本学園講堂で行われた大黒摩季さんのレコーディング・撮影の様子  
(右) 【UHB連携協定企画】本学学生対象の特別インターンシップを開催

## CONTENTS

- 大黒摩季さんから藤学園に向けたメッセージ / 2
- 未来共創フォーラム2022報告 / 4
- 大学祭～3年ぶりの対面開催～ / 5
- 日本語教員養成課程開設20周年 / 7
- FSAの活動 / 8
- My Life —卒業生たちのいま— / 8
- 私のキャンパスライフ / 10



藤女子大学  
THE WOMAN'S UNIVERSITY

レコーディング・撮影のリハーサルの様子

## 大黒 摩季さんから藤学園に 「メッセージ」をいただきました

2022年5月、藤女子中学・高等学校卒業生でシンガーソングライターの大黒摩季さんが、藤学園の講堂にてデビュー30周年を記念して制作された楽曲『Sing』のレコーディングと撮影を行いました。後日、大黒さんから本学園に向けてメッセージが届きましたのでご紹介します。



レコーディングの合間に藤女子中学・高等学校の後輩と懇談

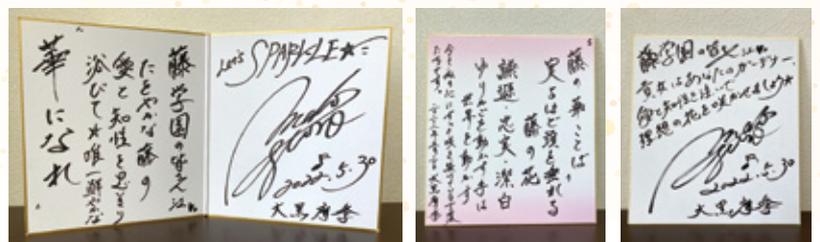
昭和63（1988）年に藤女子高等学校を卒業された大黒摩季さんが、素敵な文章を寄稿してくださいました。そこに溢れているのは、彼女の深い母校愛です。そして自分を藤に入れてくださったお母様への、心からの感謝の念。

今年、デビュー30周年記念ソング『Sing』の撮影のために、藤の講堂に来られた時、短い言葉のやり取りの中でも、彼女の母校愛がひしひしと伝わってきました。度々先生から叱られ、校長先生からの呼び出しも受け、お母様も呼ばれて、彼女の代わりにお母様が何度も頭を下げて謝ってくださった、というお話。今より厳しかった当時の校則の中で、こっそりと学外での音楽活動をするのですから、退学になるのも覚悟だったかもしれません。ところが、卒業式の日、式が終わった後に校長室に呼ばれ、最後のお叱りを覚悟して校長室に行ったところ、何と、校長先生が花束をくださったのだそうです。当時の校長はシスター山崎順子先生。大黒摩季さん、ありがとう。

藤学園理事長 Sr. 永田 淑子



左から永田理事長、大黒さん、藤女子中学・高等学校石川校長



メッセージが添えられたサイン色紙

「藤の華ことば」

藤女子中学・高等学校卒業生

シンガーソングライター 大黒 摩季

母はきつと、家業の忙しさの中で思う存分私への教育が出来なくて、藤に入れたのだと思います。2021年11月に他界した最愛の母も、母方の従姉妹も、私の親友の娘たちも、みんな藤の門をくぐり、6年間伸び伸びとしなやかに朗らかに学び成長し、それぞれの蓄を膨らませ、その門から羽搏きました。みんな女性として幸せな家庭を築き、社会人としてもしっかり活躍しています。私はまだまだ探し物はありますが、人としてアーティストとしてはきつと身に余る素晴らしい出会いと感動に出会い、作品という最高の財産に囲まれ、沢山の人たちに愛していただき、と相当幸せな人生を送れているのだと思います。

それを導いてくれた藤の言葉たちがあります。私の中の『藤の華ことば』たち。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」を例にあげて、大好きな藤棚の前で当時の先生が話してくれた『実るほど頭を垂れる藤の花』。シャイどころか人見知りで、大人にあずけられっ子だったからか喋り下手が故に何でも自己完結してしまうので、得意なことや自信があることで勝負に勝って周りを見返す、というようなとんがった性質でもあったので、この言葉が稲穂ではなし、大好きな美しい藤の花にしてもらったことで、心に留まったのだと思います。そして『謙遜・忠実・潔白』同様にこの謙遜という言葉も、むしろ社会で高慢な人や高圧的な人に出会い、裏切りや欺瞞に遭い、苦しんだり不条理に傷つけられたりした時ふと、この校訓を思い出しました。そして、決して染まらぬようにと誓い、周りで控えめに確かに頑張っている人たちがシスターの様に、やけに美しく輝いて見えて、藤の先生方と学校の風景や思い出が吹き出しました。今思えば、もしかするとある意味、高慢さやエゴイズムを持つこと、それがエンターテインメント業界を生き抜く術だったのかもしれない。でももしその道を進んでいたらもうとつくにこの世界では生きられなかったのだと今は思います。理不尽な定説に染まらず、自分のペースで周りとの調和と平和を保ちながら生きたい、人として成熟しなければきつといい音楽はきつと生まれえない、という意志が萌芽するきっかけが、校訓でした。

そして、デビューアルバムの「Time&Time ～時の女神～」という私の作品にも色付けして書きましたが、藤の教育方針の一つとして聞いた、フレーベルの言葉。『ゆりかごを動かす手は世界を動かす』この言葉は、亡くなった母が好きでした。結局私は、病気もあり親にはなれませんでした。それでも周りの子供たち、ファンの皆様のお子さんたち、への言葉や触れ合いはとても大切にしています。そして、自分がどこに向けてどんな音楽を作って行くかと迷った時に、自分が女性であるのもありますが、この言葉を思い出し、その子供たち＝未来を育み、影響し、世界を与えてゆく女性達をまず応援したい、とクリアに決まった気がしました。心や感性がまだ柔らかい、成長期の6年間を藤で過ごした中で他にもまだまだ、先生方や学校の歴史、学んだ中に素晴らしい言葉たちはたくさんあります。それらが私の感性、女性としての生き方、人としての在り方、社会・世界との関わり方……、

心と性質の基盤となり、波瀾万丈な人生でも藤の花のように雨風にもしなり決して折れることなく、静かに時を待って花を咲かせ、散っても尚、その花を栄養に新芽を出す、そんなタフな大黒摩季の生き様となりました。

忠実、といえれば日本的に自分を抑え人に尽くすイメージがありますが、真心を持って尽くすこと、それは自分らしい愛の表現そのもの。思いは届くと嬉しい、それがその人の役に立つと一層嬉しい。だから心はしまっておくより使ったほうがずっといい。潔白、純粋でいようとすれば、人一倍感じる心となり傷つくことも多いけれど、その分、感激や感動、小さな優しさにも気づけ幸せも人一倍多いのです。この三原則は、戒律的な校訓などではなく、幸せを集める磁石なのだと思います。そんな「柔らかい心」を藤が育ててくれたのだと今、改めて実感しています。きつとそれを実体験の中で知っていた母だから、小さな頃から内気で、集団行動が不得意、そのくせ感受性が強く、理解しにくかった私を藤はきつと穏やかに抱擁し影響してくれると珍しく強く入学を薦めたのだと思います。それ程、私にとって藤は大切な場所なのです。変わらずに在り続けてくれることで、時折思い出し立ち寄りだけで、世の中や時代に翻弄されそうになっても自分や理想を取り戻し、心をリセットできるスイッチでもあるのです。

この度、大黒摩季がデビュー30周年を迎え、自身が音楽を紡ぎ歌うその理由と自分の存在意義を自問自答した渾身の作品『Sing』のMusic Videoをどこでどう撮影しようかという時、一番に閃いたのが学生時代に憧れた講堂のピアノでした。あのピアノを学生が弾けるのは当時、合唱コンクールだけ。ピアノ科を受験する訳でもなく、巧くもなかったけれど、当時音楽の授業をされていたセシリア様に放課後猛特訓していただき、在学中2回だけ弾くことが叶い、その鍵盤のタッチがいまだに残っていましたので、無理を承知で学校に問い合わせたところ、快諾していただき、また一つ長年の夢が叶いました。正直、夢を追いかけ続けると心底疲れます。チャンスも自分の都合では来てくれません。普通は期限を決めて、それでダメなら向いていない、才能がないとみんな諦めてしまいますが、私は諦めが悪い(苦笑)というのか諦める・終わらせる勇気がないのか、その時無理だったとしても、もしかして“いつか”があるかもしれない、とそつと心の隅に置いておくことにしています。少女の頃に夢見た、『自分の作品をこのピアノで弾き語りたい。』叶うまでに35年近くかかったけれど、やっぱり夢を捨てずに願い努力し続けて本当によかった。途中、生きる道や心がねじ曲がることもあったけれど結果、先生方、シスターに認めていただける生き方ができて本当によかった。自分の最大の節目、今、この時に藤に還って心から良かった。この日の撮影は、正に最高の自己肯定となり、これからへの素晴らしいステップとなりました。

胸いっぱい深謝と敬愛を込めて、これからも『藤の華ことば』たちと共に、揺籠を動かす美しい手を育み、愛と平和に溢れた世界を動かし続けて欲しいと切に願います。

# 藤女子大学未来共創フォーラム2022 報告

藤女子大学未来共創フォーラムの開催が6年目を迎え、今年度は3年ぶりに対面での開催が実現しました。

第1回 2022年9月23日(金)

## 乳幼児期におけるアタッチメントと 非認知的な心の発達

文学部 文化総合学科 准教授 石井 佑可子

今年度、文化総合学科の集中講義をご担当いただいた遠藤利彦先生(東京大学大学院 教授・発達保育実践政策学センター長)にご講演いただきました。初めに、IQでは捉えられない非認知能力の重要性について、事例や実践介入を踏まえて示していただき、子どもの非認知能力の発達に肝要なアタッチメントの構築における身近な大人の役割についてお話しいただきました。

その後、M.Sさん(文化総合学科 4年)、佐藤智恵美先生(幌北ゆりかご保育園 保育士)、上原賢司先生(文化総合学科准教授)という3名からそれぞれ、青年・保育士・父親の立場からの疑問や質問が投げかけられ、遠藤先生に返答をいただきました。非常に濃い内容で、聴衆の皆さんからは「もっと聞きたかった」、「今後も開催してほしい」とのご感想が多数寄せられる、実りあるフォーラムとなりました。

第2回 2022年10月29日(土)

## おいしく楽しく健康づくり ——コロナ禍における食と運動のすすめ

人間生活学部 食物栄養学科 准教授 隈元 晴子

新型コロナウイルス感染症拡大による日常生活の変化を背景に、フレイルやロコモティブ・シンドローム(ロコモ) 予防の観点で、食と運動の両面からの講義と実践を行いました。

篠原翠先生(食物栄養学科 講師)からは、バランスの良い食生活を送ることの大切さについての説明の後、さば水煮缶や冷凍野菜など長期保存が可能で下処理が不要な食材を活用したレシピが動画で紹介されました。木本理可先生(子ども教育学科 准教授)からは、ロコモと運動、フレイルとの関係等についての解説の後、参加者全員でスクワットを実践しました。ロコモや食生活の乱れはすべての世代に共通する課題であるからこそ、健康寿命の延伸に向けて、食と運動の知識と実践が誰にとっても大切であることを認識させられました。

第3回 2022年11月26日(土)

## チャペルで聴く「冬の名作」と「オルガンの世界」

社会貢献推進会議議長 上原 賢司

今中麻貴氏(本学卒業生・元STVアナウンサー)と大野敦子氏(藤女子中学・高等学校卒業生・カトリック北1条教会オルガニスト)をお招きし、北16条キャンパスの聖マリア聖堂にて、朗読会(「フランダースの犬」、「賢者の贈り物」)とオルガン演奏会として開催されました。本フォーラムには本学卒業生も多く参加して下さり、新しい校舎やチャペルを楽しむ機会にもなったかと思われます。

また、本フォーラムでは文学部の3名の学生に協力してもらいました。T.Kさん(英語文化学科 3年)にはフォーラムの司会をしてもらいました。以下に、今中さんとのトークタイムに登場してもらったお二人の報告を載せてさせていただきます。

前日リハーサルでは、放送のプロの方たちによる、当日の流れや音の調整、椅子の配置までといったとても念入りな準備に正直圧倒されました。それでも、今中さんが優しく声をかけてくださったおかげで私たちも安心して参加できました。本番でも、「何より楽しむ気持ち」と温かいお言葉をいただき、トークタイムの時間があつという間に感じる楽しいひと時を過ごせました。(日本語・日本文学科 3年 C.Mさん)

神聖なチャペルで聞く、大野さんの心休まる演奏と、今中さんの工夫の凝らされた表現力ある朗読に圧倒され、お二方の世界観に惹き込まれる素晴らしい時間でした。今中さんと私達とのトークタイムでは、STVアナウンサー時代の貴重なお話から就職活動に関わることなどをお聞きし、皆さんと楽しい時間を共有できました。(文化総合学科 3年 I.Mさん)



ご協力、ご参加いただいた皆さまのおかげで今年度のフォーラムは全て対面にて開催することができました。あらためて御礼申し上げます。社会貢献推進会議では今後も、地域や社会と本学とをつなげる様々なフォーラムを企画していきます。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

(上原 賢司)

# 大学祭 ～3年ぶりの対面開催～

## 藤陽祭



### 先輩からの継承と 新たな試み

北16条キャンパス大学祭  
藤陽祭実行委員会委員長  
文化総合学科 3年  
O.Eさん

3年ぶりとなる有観客対面形式による藤陽祭を無事開催することができ、大変嬉しく思います。現役の委員で対

面の藤陽祭を経験したことのある人が一人もいないという状況で、委員の多くが不安を感じていました。そのような中、私たちは今年度の藤陽祭のテーマを「Mélange: 混合」とし、コロナ禍で深く人と関わることができなかった学生たちが混ざり合い、今までの伝統と新しい試みを交えた素敵な藤陽祭を作り出すという目標を掲げて活動してきました。

特別ゲストによるトークショーや専門学校(札幌ビューティックアカデミー)とのコラボ企画のような先輩方から引き継いできた企画に加えて、昨年度の完全無観客のオンライン開催の経験から「配信」も使用したス

テージイベント、新たな試みとしては仮装大学祭企画や1階テラスでの盆踊りを行い、生まれ変わった藤陽祭を一から作り上げました。

伝統的な企画も新しい試みも全てが未経験でしたが、事故やトラブルが無く全ての企画を成功させることができました。これは委員一人一人が責任を持って一から企画を考え取り組んできただけでなく、町内会など地域の方々、協賛・協力いただいた企業様など沢山の方々のお力添えがあったからです。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

私個人としては無事終わることができて肩の荷がおりましたが、反省すべき点は沢山あり、次の代に引き継いでいかなければならないと感じております。来年の藤陽祭の成功を祈っております。



俳優・桐山隼さんと集合写真



盆踊りの模様

## 藤花祭



### 一から作り上げた 藤花祭

花川キャンパス大学祭  
藤花祭実行委員会委員長  
食物栄養学科 4年  
O.Eさん

今年は、3年ぶりに対面での藤花祭を開催することができました。

藤花祭は地域の方々がたくさん訪れることが特徴です。2020年度はコロナ禍のため断念。2021年度は対面での開催が難しく、花川キャンパスでの開催は見送りました。今年は、一般の方の来場が可能になるとのことで開催を決めました。多くの学生にとって初めての大学祭となるため地域の方や学生が楽しめるように企画を練りました。

準備期間は、もともと3人しかいなかった実行委員を募集することから始まり、模擬店出店団体の募集のためにゼミを持つ先生方の研究室を訪ねて参加をお願いしたり、石狩市の様々な施設へポスターを持ちこんで大学祭の宣伝をしたり、準備に明け暮れる日々でした。

たくさんの困難を経て迎えた当日、家族連れや学生などでにぎわうロビーの様子を見た瞬間にこれまでの疲れが吹き飛び、うれしさで胸がいっぱいになったと同時にこれぞ藤花祭! だと思いました。

今年は、食物栄養学科の学生が出店するイートインスペース・子ども教育学科の学生による子供たちが楽しく遊べる模擬店・人間生活学科の学生が授業で作成した展示物をみられる模擬店といったように、3学科の特色が表れるような大学祭にすることができました。仲間や、学生部・学生課をはじめとする教職員の皆さんなど、藤花祭にご協力いただいた全ての方々のおかげで多くの皆さんに喜んでいただけました。ありがとうございました。来年度も地域の方に愛される藤花祭となるよう願っています。そして、後輩たちが作り上げる藤花祭を楽しみにしています。



抽選会ではギフトカタログやエステ券などの景品を多数用意! 皆さんに喜んでいただきました。



現在放送中「ウルトラマンデッカー」主演・松本大輝さんとの思い出の一枚



# 藤女子大学の国際交流



## 海外協定校留学の派遣再開(韓国・カナダへ)

2020年3月より、新型コロナウイルス感染症の影響で海外協定校への留学が叶わない状況が続いていましたが、2022年8月、韓国カトリック大学への3名の学生派遣を皮切りに、9月には藤ACEプログラム\*による留学で、カナダ協定校カルガリー大学へ総勢13名の学生を派遣し、2年半ぶりに海外派遣留学を再開しました。

参加者は3月に渡航準備を開始し、半年に亘る事前学習を通じて、語学力の強化や異文化への適応力を高め、現地事情や危機管理を学ぶことで、安全な渡航および留学生活への十全な備えを行いました。帰国後は留学中の経験を発表することを通じて、留学を振り返り自分にとっての意味付けを行ってもらおう機会を設ける予定です。在学生の皆さんが充実した留学生活が送れるよう、今後もグローバル教育センターとして海外派遣をサポートします。



マルクス学長から学生へ励ましの言葉が贈られました。

\*藤ACEプログラム Fuji Academic & Career English Program  
2018年度開講の英語プログラム。英語の実践的運用能力の飛躍的向上を目指す学生を対象とした特別プログラムで、文学部の全3学科が対象。選ぶコースによって英語圏への学部留学(長期・半期)または語学留学(半期)が可能で、TOEIC科目や実践スキル科目を含む多彩な科目群を通じて、英語を媒介に将来のキャリア・進路を設計することができます。

## NPO法人北海道通訳案内士協会協力「実践・観光通訳プログラム」を実施しました

7月9日(土) 白い恋人パーク(石屋製菓)にて、「実践・観光通訳プログラム」を実施しました。全国通訳案内士として活躍する4名の方々に講師としてご指導を頂きながら、参加者25名が英語と中国語のチームに分かれ、観光通訳ガイドの実地体験を行いました。



### 参加者の声

文学部 文化総合学科 3年 Y.Cさん

2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大でなかなか実践的な取り組みが出来ない中、今回こうしたプログラムに参加でき、とても良い経験になりました。準備の時間が限られる中で不安もありましたが、講師の方が優しくサポートしていただき、チームで回るので、助け合うこともできました。自信が持てない英語での発表は緊張しましたが、臆することなく、チャレンジしてみると得られるものがある!と身をもって感じた時間になりました。

文学部 英語文化学科 3年 N.Mさん

通訳案内士のお仕事は、外国語だけでなくその地域や施設についてよく知ることや、お客様が楽しめる雰囲気をつくることなども大切なのだと分かりました。入場時に頂いた「白い恋人」は、昔から北海道の定番のお菓子ですが、普段あまり食べる機会がなく、とても美味しく新たな発見でした。講師の先生や留学生のSさんに中国語の単語を教えてください、終始和やかな雰囲気で進んでいきました。とても良い経験になりました。

文学部 英語文化学科 2年 K.Nさん

プログラムは中国語・英語の2言語で行われ、私は英語のグループに参加しました。オンライン開催の事前学習では定型句やガイドの事前準備について教わり、そこで得た観光地情報等を基に各自で備えました。当日は現役の全国通訳案内士の方々と共に施設内を見学し、実践を行いました。自分の体験や知識を使い発話し、工夫可能な表現や補足等を講師の方から助言していただきました。言語面の他、仕事についても新たに知る事が多くありました。貴重な機会を嬉しく思います。

人間生活学部 人間生活学科 3年 M.Nさん

私は普段、英語を使う場面がなく、失敗したらどうしようと参加前には不安もありました。しかし講師の方々、「失敗を恐れなくて」と励ましてくださり、このプログラムをきっかけに、自信をもって英語を話せるようになりました。この経験を活かし、夏に参加した私費留学では様々な国の人と友達になって、英語で恋愛や政治の話をする事ができ、とても充実した時間を過ごせました。英語を話せるようになると視野が広がります!

交換留学生(台湾出身) S.Mさん

白い恋人パークでの「実践・観光通訳プログラム」に参加できて、嬉しかったです。札幌の観光地を通して外国語を練習することで、日常生活で使う語彙が増えただけでなく、この観光地の特徴も理解できるようになりました。留学生として、翻訳の過程で日本人の中国語に対する理解を知ることができましたし、中国語で言いたいことを日本語で他の人に説明する練習もできました。このような活動を通して、お互いに学ぶことは素晴らしいと思います。

20<sup>th</sup>

## “ 日本語教員養成課程開設20周年 ”

文学部 日本語教員養成課程 准教授 副田 恵理子

今年度、本学日本語教員養成課程は開設20周年を迎えます。私は4年目の2006年度より本課程を担当していますが、私が担当している間にも、日本語教育を取り巻く環境は大きく変わりました。特にここ数年は国内での日本語教育に大きな変化が見られ、入管法改正などにより外国人の受け入れが拡大し、日本語教育体制の整備のために令和元年「日本語教育の推進に関する法律」が施行されました。国内・道内には多くの日本語教育機関が設立され、日本語教員として活躍する卒業生がここ数年は急速に増えています。

そこで、今年はキャリア支援の一環として、様々な機関で日本語教師として活躍する卒業生の声を聞く講演会を以下3回開催しました。

### 第1回「高校・大学で日本語を教える」1月22日(土)開催

講演者：太田悠紀子さん ● 上智大学(文学部 英語文化学科 2007年卒業)  
宮田 光さん ● 札幌山の手高等学校(文学部 英語文化学科 2010年卒業)

### 第2回「日本語学校で日本語を教える」6月18日(土)開催

講演者：木下 瑞紀さん ● 学校法人理知の杜日本語学校函館校(文学部文化総合学科 2015年卒業)  
類家永美莉さん ● 友ランゲージアカデミー札幌校(文学部 日本語・日本文学科 2020年卒業)

### 第3回「海外で日本語を教える」7月17日(日)開催

講演者：三嶋久美子さん ● タイウボンラーチャターニー大学(文学部 日本語・日本文学科 2011年卒業)  
笹岡 里穂さん ● 櫻花日語学園台南校(文学部 英語文化学科 2014年卒業)



公開講演会の様子

また、私自身がこの課程において長年重視してきたのが、日本語教師にならずとも、仕事の場で、生活の場で、日本に住む外国人の支援ができる人材の育成という点です。今、北海道でも多くの外国人が生活しており、外国人との共生が求められています。其中で我々に何ができるのか、これをテーマに11月には公開講演会を開催しました。

### 公開講演会「北海道で求められる日本語支援・外国人支援とは」11月5日(土)開催

講演者：二通 信子氏 ● 一般社団法人北海道日本語センター 代表理事  
大前 遥菜氏 ● キャリアバンク株式会社 海外事業部  
西 千津氏 ● カトリック札幌司教区職員 難民移住移動者委員会担当

団体・企業・教会というそれぞれの立場で支援に携わっていらっしゃる3名の方に、北海道内の在留外国人の現状を踏まえ、支援活動の内容や課題について具体的な事例をあげてお話いただきました。本講演会は本学関係者のみならず、行政の方、現在支援に取り組んでいる方など、多くの方にご参加いただきました。情報を共有するとともに、今後の支援のあり方を検討するきっかけになったのではと思います。

現在、日本語教員は国家資格化に向けて、詳細についての議論が進められています。本課程では、今後も外国人との共生社会の中で日本語支援、外国人支援のできる人材の育成に努めていきたいと考えています。

初開催!

## ナイトオープンキャンパスのご報告

去る8月5日(金)午後6時より、北16条キャンパスにて社会人、保護者を対象としたナイトオープンキャンパスが開催されました。

日本語・日本文学科の種田和加子教授、食物栄養学科の田中洋子准教授による模擬講義には、保護者だけではなく仕事帰りのOGの参加もあり、久しぶりの大学での講義に懐かしさを感じている様子でした。

平日夜のオープンキャンパスは初めての開催となりましたが、日中に行うオープンキャンパスとは違った少人数でアットホームな雰囲気の中、大学を身近に感じる事ができたようです。

参加者の声

新鮮な学びの時間になった。

また是非開講してほしい。

平日夜の開催だと足を運びやすいと思った。



種田教授による模擬講義

「ヒロインは藤女子大学卒! 水村美苗『本格小説』の世界— 翻案小説とはなんだろうか?—」の様子



# FSAにしかできない 学習支援を目指して

文学部FSA・6期生一同



私たち北16条キャンパスのFuji Student Assistant (FSA) は、学生の皆さんが豊かな学生生活を送れるように、学習空間であるアイランズの運営や学生のお悩み相談などの学習支援活動を行っています。

今年度の前期には、学期末試験やレポートに対する不安、その他の学生生活に関する悩みを少しでも解消するために、「学期末相談会」を実施しました。その際、悩み事に対して私たちが一方的に解決方法を伝えるのではなく、同じ学生という立場から会話を通して一緒に解決方法を探っていくことを心がけました。その結果、参加した学生から「話を聞いてもらえて不安が和らいだ」「丁寧な対応が嬉しかった」という感想を頂きました。この相談会を機に普段から行っている相談受付の件数も増加し、より多くの学生の悩みを解決できていると実感しています。

アイランズの運営では、リラックスして学習に集中できるようBGMを流したり、デジタルサイネージやホワイトボードを利用しアイランズの使用方法や学内の情報を伝えたりと、居心地の良い学習空間作りを目指しています。運営や活動を行う上で、私たちは学生の目線で豊かな学生生活を送るためには何が必要かを考え、学生に寄り添った学習支援が出来るよう日々模索しながら活動しています。これまでに学んだことを生かし、これからも「学生による学生のための学習支援」を信念に活動していきたいと思ひます。

※現3年生15名が文学部FSA・6期生として活動しています。



## My Life マイライフ

### —卒業生たちのいま—

Vol.1

人間生活学部 食物栄養学科 2007年卒業  
医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院  
入江 翠



#### 患者さんのために、専門職として必要とされる職場

卒業後すぐ現在の職場に就職し、管理栄養士16年目になりました。2人の子供に恵まれ、子育てをしながらフルタイムで勤務しています。私の職場は急性期一般病院であり、病棟・外来での栄養管理や栄養指導、NST等のチーム医療に携わっています。様々な診療科の患者さんに携わる中で、特にがんや周術期の栄養に興味を持ち、がん専門管理栄養士や周術期・救急集中治療専門療法士の資格を取得しました。良くなる患者さんもいれば、そうではない方もいます。その患者さんにとって、栄養がどういう位置づけで、患者さん自身がどう感じているのかを把握しながら関わることは難しいことですが、とてもやりがいのある仕事です。



個別栄養士指導の様子

数多くある情報の中からエビデンスに基づいたものを自分の中に落とし込み、患者さんにわかりやすく伝えていくことが必要です。大学生活で印象に残っていることは、講義ではありませんが、先生から新型コロナウイルス感染症のポスター作成を依頼されたことです。友人と3人で北海道立衛生研究所を見学させて頂き、協力しながらポスターを作りました。その時に、どこから正しい情報を得るのか、得た知識をどう伝えるのかを学ぶことができ、現在の仕事にもつながっていると感じています。

人と関わる仕事は、自分自身の経験が多い方が、相手のことを考えやすくなると思います。学生のみなさんも、ぜひ色々なことにチャレンジし、時には失敗もしながら様々なことを感じて下さい。

# 大学へのご支援ありがとうございます

藤女子大学の寄付募集活動は、みなさまの温かいご支援により、2012年度からの累計が1億9千万円に達しました。藤学園創立100周年記念事業に向けたご寄付につきましても重ねてお礼申し上げます。ここに感謝の意を表しご芳名を掲載させていただきます。2022年度のご寄付につきましては、次号の広報「藤」にて、使途等をご報告いたします。

## 寄付者ご芳名(第20回) 期間 2022年4月1日～2022年9月30日(敬称略・お申込順)

〈保護者〉	〈卒業生〉	〈教職員・役員〉	〈旧教職員・旧役員〉	〈その他、法人等〉
岩崎 尚行	杉田 京子	桐島美恵子	小林 加奈	橋爪 弘子
柳本 睦子	阿部和加子	竹内 早苗	布施 紀子	原田美恵子
山崎 玲子	吉井 恭子	竹内 陽子	黒田美都子	石川 雅子
福原 直樹	井上 久子	松岡 敏子	竹田 雅子	栗原ふさ子
佐々木壽幸	川嶋 則子	齋藤 三里	木村 玲子	子玉千津子
匿名 1名	森元 芳枝	大野 芳枝	塚田 純子	匿名 23名
計 5名	中町 瑛子	阿部 洋子	大池あと美	計 52名
	秋元 道子	太田 日鶴	荒川 厚子	計 6名
	計 12名			

\*藤女子大学合唱団ウイスタリアコール06会様からの寄付金につきましては06会として管理している資金を大学へご寄付したいとの申し出があり、寄付を頂きました。紙面を借りてご報告致します。

計80件 3,907,801円

2012年度実績：377件	12,081,866円	2016年度実績：179件	16,758,365円	2020年度実績：141件	15,455,587円
2013年度実績：277件	17,413,757円	2017年度実績：153件	10,983,201円	2021年度実績：135件	4,570,376円
2014年度実績：191件	76,223,954円	2018年度実績：126件	13,001,473円		
2015年度実績：181件	6,402,354円	2019年度実績：139件	16,256,260円		

2012年4月～2022年9月末までの累計 193,054,994円

## 藤学園創立100周年記念事業へのご寄付ご芳名(第2回) 期間 2022年4月1日～2022年9月30日(敬称略・お申込順)

〈保護者〉	〈卒業生〉	〈その他、法人等〉
匿名 1名	森山 紀子	匿名 1名
計 1名	赤林 園美	計 3名

計5件 140,000円

2021年度実績：1件 50,000円 ..... 2021年4月～2022年9月末までの累計 190,000円

## ふるさと納税を活用した本学への支援制度が始まりました

札幌市において、ふるさと納税の寄付先として支援先の大学を指定することができる「大学応援プロジェクト」が始まり、本学も支援先大学として指定が可能となりました。個人の方からのご寄付については、「ふるさとチョイス」からお申し込みいただければ大学を指定することができます。ふるさと納税を通じた本学へのご支援をよろしく願っています。

詳しくはこちらをご覧ください



## 大会入賞の記録

2022年11月 現在

本学の学生が各大会において優秀な成績を収めました。おめでとうございます。

北海道日中友好協会主催

第40回 全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会

●朗読 大学生・一般の部 優勝(北海道知事賞)

文学部 英語文化学科 3年 西村 萌さん

RedBull Street Style 2022 アジア大会 ●優勝

RedBull Street Style 2022 世界大会 ●第4位

Japan Freestyle Football Championship 2022 ●第2位

人間生活学部 保育学科 4年 三好 美晴さん

第68回 全道学生弓道争覇戦

●女子Ⅲ・Ⅳ部合同リーグ 優勝

藤女子大学弓道部

第47回 北海道女子学生剣道優勝大会

●団体戦 第3位

藤女子大学剣道部

令和4年度北海道学生柔道体重別選手権大会

●48kg以下級 準優勝(全国大会進出)

藤女子大学柔道同好会

文学部 日本語・日本文学科 2年 吉田 好初さん

## 今年度本学で開催した公開講演会等 2022年11月 現在

- 2022年 6月18日 日本語教員養成課程開設20周年 第2回講演会  
日本語学校で日本語を教える
- 2022年 7月2日 2022年度藤女子大学日本語・日本文学会研究発表会  
伊藤比呂美の場所 ―『とび抜き新築鴨地蔵縁起』が切り開いたもの―
- 2022年 7月17日 日本語教員養成課程開設20周年 第3回講演会  
海外で日本語を教える
- 2022年 8月26日 2022年度英語文化学科公開講演会  
テキストをコミュニケーションの側面から分析する
- 2022年 9月23日 藤女子大学未来共創フォーラム2022【第1回目】  
乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達
- 2022年 9月24日 藤女子大学キリスト教文化研究所公開講演会  
聖書と環境問題「回勅 ラウダート・シ」を中心に
- 2022年 10月29日 藤女子大学未来共創フォーラム2022【第2回目】  
おいしく楽しく健康づくり―コロナ禍における食と運動のすすめ
- 2022年 11月5日 日本語教員養成課程開設20周年記念公開講演会  
北海道で求められる日本語支援・外国人支援とは
- 2022年 11月12日 2022年度第2回教職課程講演会  
学校と地域をつなぐコーディネーターの仕事と実践
- 2022年 11月26日 藤女子大学未来共創フォーラム2022【第3回目】  
チャペルで聴く『冬の名作』と『オルガンの世界』

## 挑戦するということ



文学部  
英語文化学科  
3年  
T.Kさん

私は現在、競技舞踏部に所属しています。私が大学に入学した年はコロナ禍が始まったばかりで、部活の新入生歓迎行事などが行われていませんでした。そのうち10月になり、「やはり何か部活に入って頑張りたい」と、4歳上の姉が学生のとときに所属していた競技舞踏部の見学に行ってきました。そこで先輩方が華麗に踊っている姿を観て魅了されました。更に先輩方から優しい歓迎を受け、私も一緒に頑張ろうと入部を決意しました。現在は部活動の全体の練習がある日もない日も、毎日のようにシューズを履いて踊っています。踊る練習に加えて、筋力トレーニングを行う、常に綺麗な姿勢を意識するなど、踊りの基礎となる身体作りにも励んでいます。

「競技舞踏」という新たな挑戦に大変な事もありますが、部員同士切磋琢磨できる環境がとても楽しいです。スタートが遅れてしまった分、人一倍努力を続けて、観ている人に感動を与えられるようにしたいです。



姉のドレスを着用!初デモン  
ストレーションの様子



憧れの先輩のドレスを借りて  
大会に出場

## 演習の発表で学んだこと



文学部  
日本語・日本文学科  
2年  
O.Mさん

2年生になり、今年度から学科の演習が始まりました。現時点で、私は、二つの古典系のゼミ(古代・中世)での発表を経験しました。発表者は担当箇所に関するレジュメを用意し、発表します。2回の発表を終えて気づいたことは、「自分が一番該当箇所を理解していないと、聞かずに内容がきちんと伝わらない」ということでした。自分の理解があやふやなまま発表すると、自分でも何を言っているのかわからなくなりますし、質問をされても良い回答が出来ません。そのため私は、自分の理解をしっかりと深めるため、複数の参考図書や資料を開き、どの本の表現が自分の理解しやすいものなのか、他の学生たちが理解しやすいだろうかと考えながら調査しました。複数の情報から自分の求める情報を探し出す作業です。大変時間もかかり、苦労しましたが、調査していく過程で新たな「気づき」があり、自分なりの文献資料の「読み」を少しだけできるようになったとも感じています。このような過程を経験して新たなものの見方や考え方を育むことは将来とても役に立つ学びであると思います。後期も発表があるので、それに向けて頑張ります。



## アルバイトで学ぶこと



文学部  
文化総合学科  
3年  
T.Hさん

私は大学2年生からケーキ屋でアルバイトを始めました。はじめは接客も製造も初めてで失敗が多かったです。しかし毎回店長やアルバイト仲間にアドバイスをもらってメモを取ったり、実践したりしているうちに失敗が減っていきました。今では接客はお客様に褒めてもらえるようになり、製造の方はケーキやアップルパイを作れるようにまですりました。それだけではなく、コロナの影響で非対面授業が多く大学での友達作りが難しかった中、アルバイト先で年齢に関係なく仲の良い友達を作ることができました。アルバイトがない休日には先輩や後輩と一緒に遊びに行っています。

また、最近ではもっと接客が上手くできるようになりたいと考えて、デパートの地下にあるお菓子屋でのアルバイトも始めました。デパートならではのルールやマナーを学びつつより高い接客の技術を身に付け、残りの大学生活をさらに充実したものになりたいと思っています。



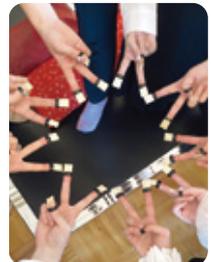
## 部活を支える立場になって



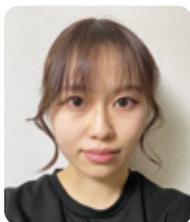
人間生活学部  
人間生活学科  
2年  
N.Mさん

私が所属する箏曲部は、現在12月開催予定の定期演奏会に向けて古典箏曲や季節の童謡、J-POPなどの曲を幅広く練習しています。お稽古を重ねることで新しく知る奏法もあり、難しさも感じつつも着実に弾ける音が多くなっていることを実感しています。後期になると先輩方の就職活動も始まり、私たち2年生が部を支えていく立場となりました。定期演奏会や他大学との交流などの行事の計画や部内にある係の役割の引継ぎをこなす必要が出てきて、初めての事に戸惑いつつも、“楽しく箏を弾きたい”という同じ目標に向かって、部員同士で連携をとりながら活動に打ち込んでいます。先日は初めて大学祭にも参加し、皆で力を合わせて無事に終わることができて前進が見られました。

頼りになる先輩方や大切な仲間たち、かわいい後輩たちと互いに労い合いながら部の伝統を守りつつ、私たちがらしさもあるような部になるように今後も精進していきたいです。



## 大学の魅力に迫る!



人間生活学部  
食物栄養学科  
2年  
K.Mさん

2年生になり突然、興味のある専門分野ができました。何年も研究を重ねてきた先生の授業は、私にとって非常に刺激的なものでした。「学ぶことは楽しい」と人生で初めて感じました。それまで勉強は辛いものでありました。第一志望の大学に行けなかったからです。しかし、授業を通して学習が楽しくなり、新しい夢ができました。そして進路について先生方に何度も相談しました。先生方は否定せず、応援してくださりアドバイスもいただきました。藤女子大学の学びの充実さと先生方のお陰で、目標を見つけられました。

そして、入試課が募集する広報実践プロジェクトにも参加しました。私自身が身にしみて感じた藤女子大学の良いところを皆に伝えたい、そんな一心で現在活動しております。企業の方のサポートを受けて日々広報のプロジェクトに取り組んでいます。藤女子大学の魅力はまだまだ沢山あるはずですよ。残りの学生生活、探しながら送るのも有意義ではないでしょうか。



広報プロジェクト活動の様子

## 私のfslife



人間生活学部  
保育学科  
4年  
M.Mさん

Freestyle footballとはサッカーのリフティングやドリブルの技術を使い、魅せる競技です。近年ではリフティングやドリブルだけでなく、バク転や側宙などアクロバットを取り入れる人やブレイクダンス・ポップダンスなど他競技の特性を取り入れる人も多いです。私がこの競技を始めたきっかけは、高校3年生の時にフットサルの会場にいた少年がリフティングを教えてくれたことでした。そして大学入学後、技の練習等に本格的に取り組むようになりました。

この競技を通して数々の大会に出て沢山のひとと出会い、繋がり、日本だけでなく世界中に友達が出来ました。また、渋谷のと真ん中でパフォーマンスをするなど都心でのイベントや撮影、海外の招待制の大会に呼んでいただき等沢山の貴重な体験をしてきました。私は大会を中心に活動していますが、日本女子最高順位を獲得し、日本一決定戦では初代チャンピオンに、また、日本女子初のアジアチャンピオンになることができました。今後もさらなる高みを目指して頑張りたいです。



※今年の大会実績は9ページの「大会入賞の記録」に掲載しております。ご参照ください。

1945年8月15日の敗戦により、日本の教育は大変転を遂げました。終戦1か月後に文部省は「新日本建設ノ教育方針」を出し、「軍国的思想及び施策を払拭し平和国家の建設を目途として…国民の教養を深め科学的思考力を養い平和愛好の念を篤くし…」と宣言しています。

更にその1か月後の10月15日には、「私立学校における宗教教育の自由を認める訓令」を出し、私立学校で宗教教育を行うことを認めました。これにより、放課後に寄宿舎や修道院応接間などを使って希望者だけに行っていた藤の宗教教育も、正課に取り入れることができるようになり、翌年度からのカリキュラム検討に取り組みました。

この時期に注目すべきものに、女子教育の振興があります。1945年10月の新内閣の閣議で「女子教育刷新要綱」が示され、男女教育機会均等、教育内容の平準化等を基本方針とし、高等教育機関が女子にも解放され、大学における男女共学を実施することとされました。

また、9月5日には、日本の捕虜から解放されたイギリスの将校たち（中にはイエズス会の司祭も）が、藤の近くの男子フランシスコ修道院を訪れ、彼らが大変親切で、ミッションを特に守ろうという気持ちがすぐにわかりました。その後何度も、司祭やカトリックの兵士たちが私たちに食料品や医薬品を持ってきたり、寄宿舎が田舎で食料買い出しの折、運搬のために大きい車を出してくれたりしました。寄宿舎と言えば、戦時中は、食糧難のために多くの学校は寄宿舎を廃止しましたが、藤では頑張っけて続け、終戦後にも丘珠の方に

あった休閑地にジャガイモなどを作って、とにかく、生徒たちを養うことができました。

学校では勤労奉仕のために時間割通りにできなかった授業も、10月末にやっと皆が帰って来て、1945年の最後の2か月間は正常に授業を行うことができました。1945年3月に4年で卒業した生徒たちのために翌年3月までの特別コースを設けたところ、33名が参加。

1945年12月にはGHQにより奉安殿の廃止が決定され、1946年6月には文部省から撤去の指示が出ました。しかし牧野校長は、奉安殿を「マリア堂」に転用して残す許可をGHQから取り付けました。この「マリア堂」には、1927年の寄宿舎完成時に天使院のシスターたちから寄贈された、「ミッションの保護者マリア」の絵が掲げられました。このマリア堂は、戦前から存在するキャンパス唯一現存の建造物です。



マリア堂となった元奉安殿に掲げられた絵（現在は中高校舎2F廊下に）

## UHBとの 連携



話し方講座 第2弾「周りと差がつく! 話し方・面接講座」の様子

### 10月14日(金) 本学学生対象「特別インターンシップ」の開催

3年生8名が参加し、ニュース原稿の作成や番組の企画等に取り組みました。参加者にとって、多くのことを学ぶ貴重な機会となりました。

### 10月15日(土) 北16条キャンパス大学祭「藤陽祭」へのご協力

当日、柴田平美アナウンサーとUHB公式キャラクターのみちゅバチにご登場いただき、会場は大盛況となりました。

### 10月24日(月) 3年生対象「話し方講座 第2弾」の開催

対面・非対面あわせて28名の学生が参加し、中村剛大アナウンサーから就職活動における面接のポイントなどを教えていただきました。発声などの実践編も開かれました。